

<辛口時評>

「吃飯了嗎」から「你好」へ

先日、日中国交正常化30周年、県日中創立20周年の集いで久しぶりにYさんに会った。幼少期を中国で過ごした在日韓国人で、朝鮮半島の平和統一をライフワークにしている方だ。Yさんの話は情熱と正義感にあふれていて、いつも啓発される。この日もそうだった。

Yさんはなんと七十六歳の高齢の身で、最近、中国の沿海部から内陸部まで3千キロを車で走破してきたという。早速感想を問うと、青年のように目を輝かせ、「中国は変わりました。もはや発展途上国ではありません。中進国の段階に入ってきました。農村にも行きましたが、瀟洒(しようにしゃ)な2階、3階建ての家が緑の中に建っていて、北欧の農村を歩いているようでした。ある農家に入ってみると電化製品はそろっていました。壁に毛沢東の写真があったので老夫婦に聞くと、『こんな生活ができるのも、毛主席のおかげなので毎日拝んでいる』とのことでした」と話し始めた。

Yさんは老夫婦の気持ちが痛いほど分かった。幼少期を過ごした革命前の中国は本当に貧しかった。農民の暮らしはとくにひどかった。毎日、食にありつけるかどうかが大問題だった。

「だから、当時の庶民の朝の挨拶(あいさつ)は『吃飯了嗎?』(チーフアンラマ、メシ食べたか)だったのですよ。庶民が『你好!』(おはよう)と挨拶できるようになったのは革命後のことなんです。お年寄りには毛沢東は神様なんです」と言って、Yさんは少し目を潤ませていた。

「チーフアンラマ」には私もホロ苦い記憶がある。私は戦後間もなく外国研究の専門大学に入って中国科に在籍したが、数人が相部屋の学生寮で朝の挨拶は各自の専攻語ですることになった。私が当時の教科書どおり「チーフアンラマ」と言うと、どんな意味かと聞かれ「ご飯を食べましたか」という意味だと答えると「それが朝の挨拶かよ。貧乏な国だなあ」と、ばかにしたような学友がいたので、「誰が中国を貧乏にしたのか知ってるのか」と気色ばんだ。私の郷里は長塚節が「土」で描いた農村に近く、漱石が「悲惨な生活」と嘆じた貧農の暮らしを身近に見ていたので「チーフアンラマ」の心境がよく分かり、自分がばかにされた気がして腹を立てたが、食堂のベルが鳴ったので止めてしまった。

ところが、文化大革命末期の1975年に初めて訪中し、上海郊外の農村を視察したとき、かつての日本の貧農と同じ「悲惨な生活」を見て息をのんだ。農民のうつろな目、粗末な身なり、遅れた農具。私は文革にも中国社会主義にも幻滅した。いや、中国崩壊の予兆さえ感じた。だが、実ははこのころ、この貧困のドン底で、国の路線をめぐる保守派(文革派)と改革派が激しい死闘を演

じていたのだ。そして1976年、鄧小平の率いる改革派が勝利し、79年から革命的な路線転換である改革・開放の全面展開が始まった。

それから22年目の昨年、中国は「世界の工場」に生まれ変わった。さらにWTO加盟、北京オリンピック招致、APEC上海会議の成功などで国際社会における地位を大きく向上させた。教条的社会主義で窒息していた国民のエネルギーが、改革開放によって爆発的に解き放たれ、21世紀とともに国際社会の主役に躍り出た感じである。

ある学者の推計では、上海市の一人当たりGDPはすでに1万5千ドル、北京市が9千9百ドルで先進国水準に達し、天津、広東、江蘇、浙江、福建、遼寧などの沿海地域も中進国に近いという。同地域の人口は3億人で、日本の2.5倍の巨大な消費市場が拓けている(沈才彬氏)。勿論(もちろん)、中国は広大(日本の2.5倍)で、中・西部には一人当たり数百ドルの貧しい10億の民がいる。環境問題、地域格差、失業など難問も山積している。したがって、依然、発展途上国だというのが中国政府の公式見解である。

しかし、79年から22年余りで3億人が中・先進国並みの生活水準を実現しつつあるのは、驚嘆に値する。28年前、上海郊外で見た農民の「悲惨な生活」を思うと、Yさんのいう「チーフアンラマ」から「ニーハオ」への歩みの重さをあらためてかみしめざるを得ない。

こうした中国社会の現実には、政治と国民の生活がいかに密接な関係にあるか、政治家のリーダーシップの中身が、国民の生活と国家の運命をいかに大きく変えるかを示しており、決して他人事でないことを痛感する。